【座談会】

創設期の頃の思い出

——床並繁先生を偲んで——

出席者　井上　章（57期）　森　　孝（60期）
狩野隼一（57期）　狩野　茂（61期）
時田貞明（57期）　高木　喬（61期）
林　新哉（58期）　秋山義明（64期）
遠山弘文（60期）　井田　寛（64期）
司　会　木内貴史（75期）

籠球部誕生

——昭和十五年、床並先生が静中に赴任されてから籠球部が誕生したと伺っていますが。

井上　当時、校内大会というのがあって、クラス対抗でマラソンやサッカーをやったりしていたが、床並先生が来てからバスケットとバレーが加わった。やるにあたって、今のプールの辺りにコートを造ったが、校内大会に備えて我々が練習しているとき、床並先生がよく見に来られた。

狩野　それが昭和十五年だよ。僕が四年の時で同好会として始まった。そして、十六年に正式に籠球班になったんだ。今でいう部だよ。

——昭和三十三年に創刊された部報の中に、床並先生が寄稿された『部の歴史—思い出のくさぐさ』の一文があるが、そこで先生が創設当初の思い出を語っていますので、その個所を読んでみます。

「……当時の静中校長、楢崎先生から静岡に来てはと招聘（しょうへい）を受け、転任する事に決心した。四月の転任までに楢崎先生から校友会誌

四〇号が送られてきた。早速運動欄の所を一瞥したが籠球部がない。これではさびしい、是非自分が行ったら籠球部をこしらえてやろうと決心した。四月に転任して早々、廊下職員室横の黒板に〝籠球同好会員募集〟の公告を出した。そのためか、そのころからボツボツ休み時間などにボールを借りてきて、投げておる生徒の姿が見受けられるようになった。かくて同好的グループとして集まった者に、当時の四年生の池谷、小林、安孫子、狩野、時田などがいた。主として私が授業に関係していた学年の者だった……」

狩野　一年たって山崎が入り、それから山本や林だの大きいのが入ってきた。籠球部になった頃は一〇人位じゃなかったかな。

――一般の生徒の間でバスケットはどんなスポーツにみられていたんですか。

狩野　ほとんど理解されてなかったな。もっとも僕らの頃は、運動全体が非常に停滞していたからね。野球、柔道、剣道、陸上、水泳も弱くて、強いのは一つもなかった。

――井上さん、狩野さん、時田さんがバスケットを始められた動機はなんだったんですか。

狩野　なにか運動をやりたかった。そうはいうものの、四年生で途中から既にある運動部に入るのはいやだったから、新しい籠球同好会に入ったんだ。

井上　それと床並先生の影響が多分にあったんじゃないかな。先生はとても気さくで生徒の中に飛び込んできた。

森　あまり怒らなかったね。

時田　技より、とにかく体を鍛えなさいといって……。

狩野　練習は石だらけのグラウンドでやったんだ。まるで河原のようで……。僕の記憶ではゴールが二つあったな。靴が一番困ったんだよな。

時田　靴なんかなくって、裸足だよね。バスケッ

トシューズをもっていたのは山崎だけで、あとの選手はみんな運動靴で、試合の時だけ履いた。

狩野　せっかく履いても、すぐだめになっちゃうんだな。（笑い）

床並先生による指導

――床並先生の指導はどうでしたか。かなりハードだったんですか。

狩野　非常に理論的だったが、練習は全然厳しくなかったね。

時田　先生もいっしょによく走ったよ。

狩野　からだは小さいけど、すばしっこくて、いつも先頭に立っていた。バスケットは基礎に非常に忠実だったな。たとえば、パスの場合、チェストパス、ショルダーパス、アンダーパス以外は怒られた。それからボールはいつも胸に持っていて、パスやドリブルやシュートなどなんでもできる態勢をとっているようにといわれた。シュートも実に独特だったな。

――どんなシュートをしたんですか。

狩野　ランニングシュートはワンハンドシュートだよ。あの当時としてはモダンだったな。今で言うレイアップシュートで、他の学校ではやっていなかった。ジャンプシュートなんかにしても、体の対角線を使ってやりなさいと教えられた。

――ディフェンスはどうでしたか。

狩野　マンツーマンでは、とてもついていけないから、ゾーンディフェンスをやった。二―一―二だったな。ゾーンなんてやっているところはなかったから、最初、静商が戸惑ってしまって、こっちがリードしちゃったんだ。（笑い）

高木　先生自身背が低いから、チームプレーで勝とうと考えたんだ。

狩野　ドリブルは長くやっていると叱られた。チームプレーにならんといってね。

高木　ボールを持っている反対側の選手は必ず走

れ、とも言ってたね。

狩野　フリースローなんかも「胸を張って、天に向かって腕を伸ばせ」と教えられた。腕が伸びていないとうるさく怒られた。

初めての公式戦

――ずいぶん理論的だったんですね。練習を重ねて、いよいよ試合になりますが。

狩野　試合は少なかったが、一番最初は師範学校と練習試合をやって互角だった。これはいけるぞということで張り切ったんだが、八月の神宮大会中部予選の一回戦で静商に当たっちゃったんだ。最初はこちらが二、三ゴール先攻したものだから、静商が慌ててね。しかし、こちらは力がないから、線香花火みたいに結局負けちゃった。（笑い）

――公式戦の初勝利はいつだったんですか。

狩野　静商戦の後の焼津水産との試合が初勝利だったな。25対16で勝った。それから九月の浜松高等工業主催の東海近県大会でも接戦の末、見附中学に勝ったんだ。18対17だったと思う。

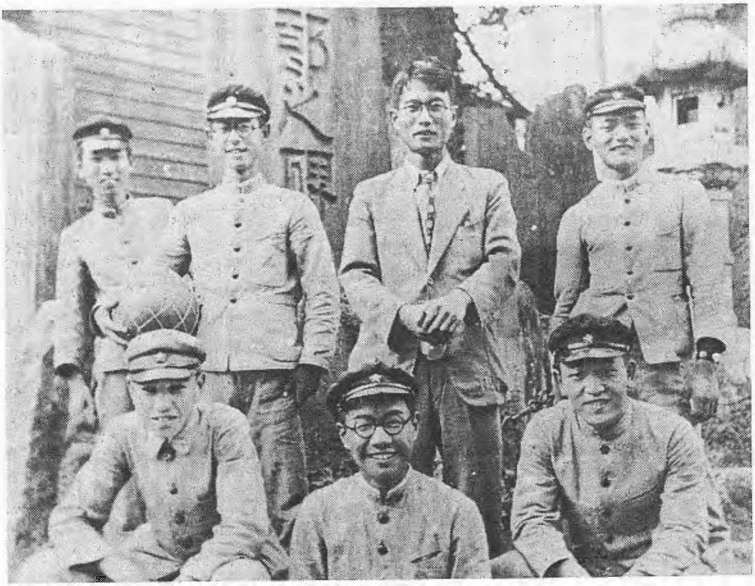
――床並先生の文章に「一回戦で見附中に一点差で勝ち、準決勝で東部の雄、沼商と対戦、速攻で押しまくられて56対9で惨敗した。その時の我々の落胆、だれも話すものなし…」と書いてありますが。

狩野　そうなんだよ。一回戦は勝ったけど、次の試合でこてんぱにやられちゃった。56対9どころじゃない。もっとやられていたよ。（笑い）

――当時、沼商は強かったんですね。

狩野　沼商と静商が強かった。あの時は確か沼商が優勝したな。相撲でいえば静中は幕下、沼商、静商が幕内で、相手の胸を借りるのが精一杯だった。

遠山　静商には体育館があって、そこで練習をやっていた。静中はそんなもの無くて、河原でやっているようなものだったから仕方ない。



中等籠球大会(昭和16年9月)。準決勝で沼商と対戦した後。前列左から遠山、狩野、小林。後列左から山崎、安孫子床並先生、池谷。

狩野　弱かったけど、だんだん格好を成してきて高等学校（現静岡大）と試合をやっても、いい勝負をするようになってきた。

のぼりで作ったユニホーム

――当時、ユニホームはどんなだったんですか。

時田　静中の校章が一つ入っているだけのもので、それに番号をつけたんだよ。

遠山　狩野さんが応援団旗のようなものをユニホームにしちゃったことがありますね。

狩野　あれは応援団旗じゃないよ。当時、応援団に〝のぼり〟があって、使われずに眠っていたので、それを拝借してユニホームにしちゃったんだ。

遠山　茶色で白抜きの模様がところどころありましたね。

狩野　赤や黄色など色々な〝のぼり〟があったが、遠慮して一番地味なやつにしたんだ。

時田　あのユニホームはとうとう着なかったんで

すよ。バレて問題になっちゃった。（笑い）

狩野　しばらく着たんだよ。ユニホームが出来たっていうことで、みんなニコニコしていい調子でやっていたんだ。でも、段々うるさくなってきたから池谷と相談して、どこかへしまっちゃおう、ということになったんだ。

遠山　まさにユニホーム事件ですね。

創部二年目に県大会優勝

――翌年の昭和十七年、創部二年目に県大会で優勝しましたね。

狩野　昭和十七年は五月頃沼津へ遠征して、沼津中、沼商とやったんだ。両方とも勝っちゃって、今年は強いぞ！　そのうちにだんだん調子が出てきて、とうとう夏は優勝しちゃったんだ。

遠山　まさか優勝するとは思わなかったが、山崎さんが頑張った。

――キャプテンの山崎さんですね。床並先生も山崎さんをとても褒めていますね――「彼は実に籠球が好きだった。籠球に明け、籠球に暮れたといっても過言ではない。俗にいうカラスの鳴かない日はあっても、彼の姿がコートに現れない日はない。私も元来好きだったが彼には及ばない。当時のコートは小石の多い凹凸の実におぞいコートだった。彼は率先して部員を督励して、このコートの地ならしに当たった。彼の精魂打ち込んだ熱意には今でも頭が下がる。まったくその年の県下大会に優勝したのは彼あってのことだった―」

狩野　山崎は床並先生と同じように小さくて敏捷だったな。あの時のチームは山本、林の長身センターと、山崎らのコンビネーションが非常によかったのが最大の勝因だと思う。

林　僕が一八〇センチ、山本さんは一八四、五センチありましたね。僕も大きかったけど、山本さんは本当に大きいと思った。

狩野　当時は一七〇センチあれば大きかったんだ。

だから山本はまさにスーパースターだった。どこの学校と試合をしても、静中にはノッポの山本がいるからダメだと、諦めていた。そして、もう一枚、林がいたからね。山本だけをマークしていると、これまた大きい林にゴール下でやられてしまうんだ。

井上　あの時は一日三試合やったね。

――随分大変だったでしょう。

狩野　いや、当時は一五分ハーフでとにかく短かくて、それにみんな元気があったから三試合だって平気だったよ。

森　一試合目の沼中戦は一点差で四苦八苦の末27対26で勝った。準決勝では苦手な静商と当たると思っていたのに、三島商が静商に勝ってしまったから〝よし、三商ならいけるぞ!〟ということで36対27の九点差で勝ち、その勢いで決勝にも勝っちゃった。

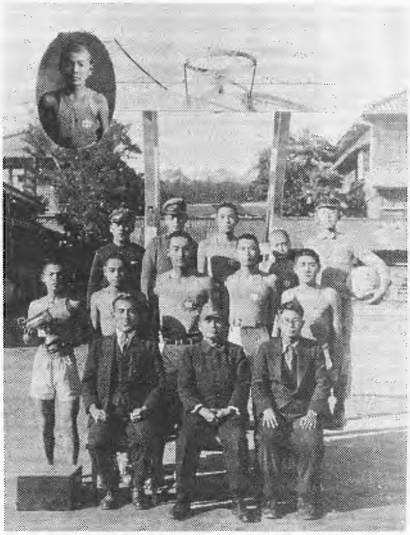
――床並先生の手記に試合の模様がとてもよく書かれています――「まず山崎がシュートして幸先よいスタート、前半やや押され気味で16対20で終り。後半になって遠山、山崎の見事なコンビネーション、山本のフォローシュート、林、伊藤のフォロー、ボールゲットと実に鮮やかに冴え、たちまち追い越し、その差は二〇点ばかりになった。しかし、敵もさるもの、残り二、三分というところで二、三ゴール入れて我々に迫ってきた。その差は一〇点、早く時間が来ればよい、このまま持ち堪えてくれればよいと念じ、その時のやるせない、焦れったい気持ちは、今でも感ずることができる。ただ夢中になって応援した。ピリッピリッピリッ、タイムアップの笛、勝った、勝ったのだ。夢ではないのだろうか。夢ではない。確かにスコアは45対35である。嬉しくて嬉しくて我を忘れて選手を迎え喜んだ。…帰りは、その感激を語らいながら草薙から歩いて帰った。夕闇迫る静清国道を、晴れの優者達は優勝カップを手に、意気揚々と感激

に胸ふるわせながら歩いて帰った」

森　そう、あの時は嬉しくて電車に乗らず歩いて帰ってきた。

遠山　それに、あの時静岡の精華とか県立の女子生徒が応援してくれたから、なお嬉しかった。（笑い）

狩野　しかし、残念なことに明治神宮大会には出場できなかったんだ。籠球は男女いずれか一チームで、全国的なレベルでは精華のほうが良い成績をあげられるだろうということで、静中は辞退したんだ。



県下大会で優勝。前列左から間処校長
矢部教頭、床並先生。

――床並先生も「生徒の心中察して、胸えぐられる思いだった」と書いておられますね。

遠山　僕は優勝したのに神宮大会にいけなかったものだから、県の体育協会だったと思うが、そこに投書したんだ。あとで校長先生に怒られちゃった。（笑い）

戦時色強まり、部活中止

――昭和十八年、戦争がだいぶ厳しい状況になってきましたが。

遠山　戦時色が強くなってきて、テニス、サッカー、ピンポン、野球がダメになった。球技ではバスケットとバレーはよかったんだ。そこで練習はテニスコートに移ったんだ。しかし、靴やボールが配給になってきた。そして十九年の秋から動員が始まった。

森　それで部活が終わってしまったんだ。

狩野（茂）　私は高木より遅くて、遠山先輩たちが優勝した時の秋に入部しましたが、戦争で本当に短い期間しかバスケットをやることができなくなってしまった。

秋山　長谷の校舎にも兵隊さんが入ってきた。三年生以上は全員動員で三菱や住友へ行き、我々一、二年生がだいたい一日おきに行っていた。

遠山　はじめの頃は学校に時々行ってはボールを握ったけど、夜勤をやるようになってからそれもとうとう出来なくなってしまった。

秋山　僕は校舎が長谷にあった時入学したが、その頃にはバスケットなんかなかったんだよな。みんな戦時色の強い運動部ばかりで、僕はグライダー部に入った。

戦後の混乱の中で部活再開

――十九年の秋の動員が始まってから戦争が終わるまで静中バスケットは休部となってしまいましたが、戦後どのように再開しましたか。

井田　僕らは戦後小鹿にある三菱重工の事務所を仮校舎に使い、その後旧三十四連隊を改造した城内の校舎に移ったが、そこには初めコートがなかった。駅南から通っていた亀山、鈴木、石川ら五、六人でバスケットを初めてみようかということになった。鈴木は当時水泳部にいたが背が高かったからスカウトしちゃった。秋山も引っぱり込んで村上先生のところに行き「バスケットというものをやってみたいと思うがどうでしょう」と相談したんだ。先生も「いいじゃないか」と言って予算をとりつけて、ボールを買ってくれた。

――それは何年頃ですか。

秋山　昭和二十二年だと思う。一三人くらいで始めたかな。

井田　ボールといっても、戦後でなにもない頃のボールだから物が悪かった。使っているうちに伸

びてしまって、倍くらいの大きさになっちゃう。

(笑い)

秋山 ゴムのチューブのボールで、周りを革で覆って紐で結んだものだったね。

井田 よく縫ったところがほどけて切れちゃうんだが、マネージャーの石川が家に帰って縫ってきてくれた。

――練習はどのようにしたんですか。

井田 その頃、遠山さんや高木さんなど先輩に教えに来てもらって始めてたんだ。毎日毎日、城内の砂場でパス練習をしていたわけです。裸足でほこりにまみれて。その頃静商には体育館があったから、体育館でやりたくて、よく試合を申し込んだりもした。そういうことでボール一つ持って右往左往していた。(笑い)

秋山 静商のコートを借りたんですが、静商が練習している間は外でパス練習をしていて、彼らが引きあげると泥棒猫のように体育館に入ってコートで練習させてもらった。

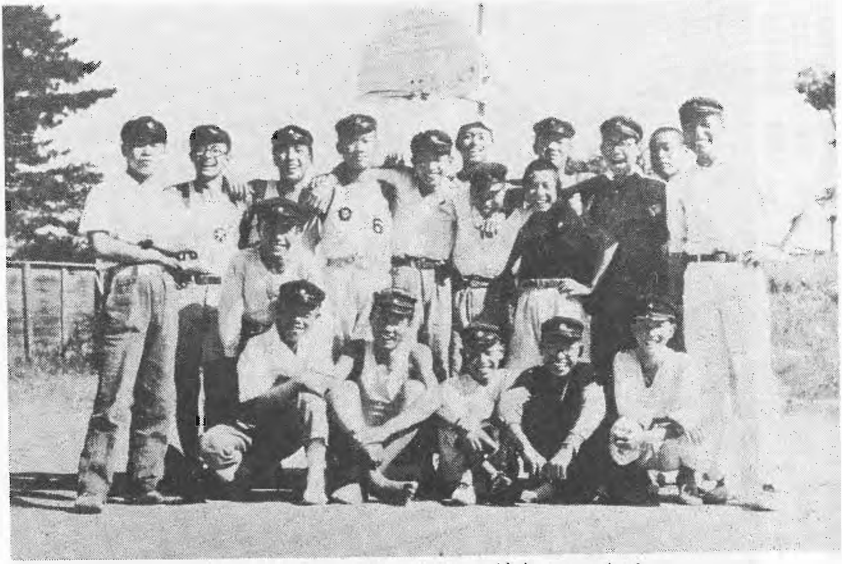
高木 その後、今の駿府公園の野球場のレフトの後ろに、バレーとバスケットのコートが並べて造られた。

井田 ようやくコートができたから、嬉しくってね。コートに丸太ん棒を立ててその上に扇形のボードがついていた。毎日、放課後になるとボールを持ってコートに行った。リングにネットが張ってないから、シュートしてもボールが入ったのか入らなかったのかよく分からなかった。

――試合のほうはどうでしたか。

井田 ゲームどころではなかった。靴は無いし、ボールは無いし…。ユニホームも無くって、自分で番号を作ってくっつけたんだ。名前は静岡ミドルスクールということでSMCと書いた。

秋山 なんでも自分達で作ったね。パンツも白くて長いズボンを切ったりして作った。試合でよく行ったのは草薙だった。国体予選で二、三回



戦後になって、最初に練習した城内のコートで。

くらいは勝ったかな。

——戦後の混乱の中で、部活を再開するにはいろいろ苦労があったんですね。

井田　コーチもいなかったし、素人が集まってチームをつくったわけでしょ。だから一番身近な遠山さんや高木さんなどの手を借りないと出来なかったんですよ。

遠山　まあ、我々も当時食糧がなくて、東京で下宿にいるよりは家にいることが多かったから、練習にいったんだよ。

高木　面倒をみた、なんていうものじゃなくて、我々が遊びに行ったんだよね。

井田　毎日、毎日、先輩達が来てくれるから、先生が感心して部として認めてくれたんですよ。

——ごく普通の生徒と床並先生との出会いから籠球部が生まれ、戦中戦後の動乱期にもかかわらず、絶えることなく先輩から後輩へと受け継がれてきた様子をうかがい知ることができました。今日は

どうもありがとうございました。